照天姫

硯山

昔ある國の王樣が照天姫と云ふ一人のお姫樣をお持でした。處か此お姫樣は實に何とも云へない程きれいな方で誰でも見て居ると茫然する程立派な方でありました。そしてお顏色は何時もにこやかで御氣嫌の惡そをなをは一度も見たことがないとおそばの侍女などが云ふ位でお身体は何時も御丈夫でお心はいつでも柔和で、其上大勢の家來達には實に〳〵親切な想ひ遣りのある方で少しも我儘や無理剛情をお仰つたことはありませんでした。そこへ以て來て最一つ不思議なをには夜になると此お姫樣の身体から恰で電氣燈の樣な光がぱあつと射すのでお側に居ると眩ばしい位でした。それ

故此御姫様が御生れになつてからは御殿中の電氣燈は皆御廢止になりました。殊に近頃はお姫様が毎晩お殿のお屋根にお上りなさるので國中は恰で晝間の様に明くなりますから、何處の家でも燈火をつけることを止てしまいました。王様は此様な可愛らしいお姫様をお持なすつたので何時も〳〵御自慢でしたが、そを善いことばかりは續かぬもので王様はだん〳〵御年を召しますのに未だお世繼になる皇子が一人もありませんでした。それで遂に或年の事王様は方々の國々へ御布令を出して何んでも此王様の仕ろと云ふことを三度したらば其人に此お姫様を遣つてそして此國の王様にすると仰せられました。そこで來るは〳〵方々の國から小利口な青年が續々と遣つて來て我こそ此姫様のお婿様になつて王様の位に昇らうと思ひ込んで幾人となく遣つて來ました。處が此王様の國へ行くには大き山を三つと大きな川を三つ越なければ何うしても行かれず其山には澤山の虎や澤山の蛇が住んで居て大抵の人は食はれてしまいますし川には大き鰐鮫が泳いで居て大抵な舟は轉覆返してしまいますので迎も容易には行かれませんたまには大骨折で行く人がありても今度は王様の御仰せが迎も並の人に出來る事でないので誰れも閉口して仕舞いました。

處が此國から大分離れた西の方の國の王様の所に一人の利口な皇子がありました。此皇子も何うかして彼のお姫様を貰ひたいものだと色々考へた末遂に出掛けることしましてお父様にお願をすると

お父様は

「お前が何うしても行つて見たいと云ふならば行つてもよいが其代り遣り損つて歸へつて來ても家へは入れないが夫れでもよいかね」

と云はれましたので流石の皇子も暫し考へて居ましたが頓がてきつぱりと

「お父様私きつと遣り遂げて來ます。若し出來なかつたならば死ぬ迄も歸りません」

と申し上げたのでお父様は御許しになりましてお父様の大事な丈夫な馬を下さいました。そして御辨當には母様がおいしいサンドウイチを造しらへて下さいました。皇子は此馬に乘つてお辨當を持つて段々と東の方に遣つて來ますと、太陽がキラ〳〵と照り付けるので暑くて〳〵汗はだく〳〵垂れるし喉は喝いて堪りません。漸くの事で、とある森の處に參りますと皇子はヒラリと馬から下りて側らの木に之を繫いで草を食はせながら休ませて置き自分も一休みしました。それから大分お腹がすきましたので母様のこしらへて下さつたお辨當を出して食べ樣と思つて先づ布呂敷を解き包み紙を退けて中を見るとおいしそをなバンの上に一匹の赤蟻が匐つて居ました。平常から情深い皇子は之を見て

「ヤア蟻君、君もバンが好きかね、それぢゃあ、其は君に進上しやう」と云ひながら上の一つを退けて側に置いて其下のを見ると生憎之にも赤蟻が居ました。然も今度は二匹居ました。皇子は

「ヲヤ〳〵茲にもお居でか仕方がない是も君達に上げ樣と」云つて又側に取り退けて、偖て今度は

愈自分が食べ樣と思つて下を見ると之にも又赤蟻が然もだん〳〵殖えて三匹居ます、是には皇子もがつかりして

「エー仕方がない。蟻さんもひもじいだらう皆上げやう、遠慮なく、お食べ」と云つたまゝ側の方に　　儘腕を枕に寢てしまいました

處が此三匹の赤蟻の中の一匹は蟻の王樣であつたものですから大層此皇子の情深いのに感心して寢て居る皇子の耳の傍に匐つて來て

「若樣、今日は有りがたう御座いました。お蔭樣で大層甘い御馳走を頂きました、私は赤蟻の王で御座います、今日の御禮に此後何か御用が御座いましたらば致しますから其時は赤蟻王〳〵と三度御呼び下さいまし」と云ひましたが皇子

は眠むかつたので碌に返事もしませんでした。其中に日も追々蔭つて來て暑さも幾分減つて來ましたから皇子は

「ドレ出掛け樣か」と云ひながら起き上つて着物の塵を拂ひ馬に乘つて又も東の方へと進んで來ました。スルト

頓ての事に例の恐い虎のある大きな山にさし掛りました。強つい皇子も少し薄氣味惡く思ひながら山奥深く來ますと其處に一つの湖がありました。皇子は何氣なしに此傍を通つて行かうとすると道の傍の草叢の中から何んだか恐ろしい唸り聲が聞えます。ソート窺いて見ると一匹の大虎が大きな岩に前足を挾まれて拔くことが出來ず足からは血が出て苦しんで居る所です。皇子は是を見て

「アヽ、いゝあんばいだ此間に早く逃げ樣」と思つて馬を急がせて五六間行きましたが、根が情深い皇子は虎の苦しそをな唸り聲を聞いて又も馬を止めて考へました。そして

「アヽ矢張り可哀そをだ、ナニ若し飛び掛つて來たら此劍で突き殺して遣らう、若しいけなかたらピストルもあるからいゝやと云ひながら馬を返して先きの所へ來てヒラリと馬から下り平氣で虎の傍を通つて大な岩の後に回つて其大岩を動かして見ましたが中々動きません。何か棒はないかと見回はすと向ふの方に大きな丸太が一本ありました。之を持つて來て漸々のことで大きな岩を少し持ち上げて虎の前足を離して遣りました。岩から離れた虎は直にも皇子に飛び掛るかと思ひの外虎は然も嬉しそをに痛い前足を引き摺りながら皇子の傍に來てお辭義をして

「若樣誠に何うも有りがたう御座いました。お蔭樣で私も生命が助かりました。此後何か御用がありましたら何うか虎の王〳〵とお仰つて下さいまし然をすれは私は直に出掛けて行つて御恩返しを致ます。」

と云つて何處かへ行つてしまいました。それから

皇子は此山を越えて今度は大きな川を渡らうとしますと此川には舟がありません。おまけに水の中には鰐鮫が住んで居て迚も游いでは渡れません。仕方がありませんから側の大きな木を伐り倒ほして腰の劍を拔いて此木を削つて丸木舟を造つてやつとのことで之を水に浮べてイザ渡らうとしやすと何處から來たのか穢ない着物を着て穢ない布呂敷包みを持つた顏のこはい一人の乞食が出て來まして

「オヽ若樣御情で御座います何うぞ私も連れて行つて下さいまし此間から向へ渡れずに困つて居たのです。」

と賴みましたので皇子は別段嫌な顏もせず、

「ソーカそれぢや一所に載せて上げやう、早く御乘り。」

と心よく乘せて愈大川の中へ漕ぎ出ました。スルト彼方から　此方からも大きな鰐鮫がウヨ〳〵遣て來ました。そうして舟の傍へ來ては暴れたり舟の下をくゞつたりするので丸木舟は今にも轉覆返りそをです。是れを見た乞食は唯アヽ〳〵と云つてる許りでブル〳〵震へ上つて遂には漕ぐことも出來ず眞靑になつて寢てしまいました。皇子は一人で鰐を逐ひ拂つたり舟を漕いだりして漸くのことで向ひ岸につきましたが陸へ上つた時には最う腕も何も折れそをになつてしまいました。乞食のお爺さんも漸く起き上つて來て

「若樣、何うも有りがたう御座いました、私は何もお禮するものがありませんが、此處は此布呂敷の中に小さい壺があります。是をお禮の印に差上げませう」

と云つて出しましたのを見ると誠に美麗な小さな壺でした。皇子は欲しくもないと云ふ風で見て居ると乞食のお爺さんは

「若樣、あなたお腹がおすきでせう。私が唯今御馳走致しませう、」

と云ひながら此壺を兩手で持ち上げて

「壺よ〳〵有り難さ壺よ、二人のお辨當の出ますやうに、」

と云つて此壺を皇子の前に下しました。

スルト壺の中には何時の間に何處から入れたかおかしそをな御馳走がちやんと入つて居ましたので皇子も喫驚してお爺さんにお禮を云ひながら二人でお飯を喰べました。食べながら色々なお話をして皇子は東の國に照天姫を貰ひに行くのだと話しますと乞食は

「そをですか夫れは大變な御奮發ですね、夫れぢやよいことを敎へて上げませう是から少し行くと左り側に大きな森があります。其中に眠り仙人と仙人が竹の寢臺の上に寢て居ますから其處へ行つてあなたの馬を預けて其仙人の乘つてる寢臺を借りて其へ乘つて御出なさい、然すれば直に照天姫の國へ行かれます」

と敎へて呉れました。そこで皇子は馬に乘つて又もだん〳〵行きますと成程左り手に大きな森がありました。森の中へ入つて見ますと遙か向ふの方の大木の根株に一人の仙人が寢臺に乘つて寢て居ました。皇子は馬から下りて仙人の傍に行き暫く待て居ますと頓がて仙人は眼を覺ましてあたりキヨロ〳〵見廻はして居まから皇子は此處ぞと先づ御辭義をして

「私は是から東の國へ照天姫を貰ひに行くもので御座います。承ればあなたの寢臺は大層便利なものだそをで御座いますが何うか少し拜借することは出來ますまいか其代り私の馬を御預けして參ります」と云ふと仙人は默然として皇子の頭の先から足の先迄見て居ました、そして頓がての事に

「ウーお前さんなら嘘も吐くまい。必と返して呉れるだらう、宜しい大切な寶だけれど貸して上げやう

と云つて貸して呉れました。そして其使ひ方迄敎へて呉れました、皇子は喜んで馬を預けて寢臺の

上に乘つて、口の中で

「寢臺よ〳〵有り難き寢臺よ、是から東の國の玉樣の御殿へ行け

と云ひますとガタ〳〵と云ふ音と共に寢臺はフーッと空天に舞ひ上つて風を切つて飛んで行つて忽ちバタと地面に落ちました、見ると前には王樣の御殿があります、けれど夜の事で門が閉まつて居て開きません。仕方がありませんから寢臺の上で寢て居ると其中に東が白らんで夜が明けて來ましたので役人も起き出し御城の御門も明きました。そこで皇子は門番の處へ行つて西の國の皇子だがお姫樣を貰ひに來ましたと云ひますと早速王樣へ申上げる王樣は「うるさい若者がまた來たか」と仰しやりながら若者を呼び出して御覽になつて

「お前か、西の國から來たのは、然うか、夫れでは今此處に三つの仕事があるが之をすつかり仕遂げれば此國の王にするが然もなくば姫を遣る譯には行かぬ。三つの中の先づ第一は此處に百斤の芥子の實がある、此芥子の實から油を今夜の中に取つてしまつて呉れ」とおつしやいました。

皇子は王樣の前を下がつて外へ出ましたが何うも今夜一晩に芥子の實から油を取つしまうことは出來ない何うしたらよからうと思つて居るとフト氣が付いたのは蟻のことです、皇子は

「アヽ、そをだ蟻に相談しやう、そしたら何とか工夫が出來るだらう、赤蟻王々々々」

と三度呼びますと一匹の大赤蟻が皇子の足許に出て來て

「ヲヽ若樣、私は此處に居ります、若樣の足許に居りますよ、何か御用でも出來ましたか、大層御心配の御樣子ですが」と云ひました、

皇子は心配と云ふのは斯う云ふ譯だと話しますと蟻は

「アヽそんなことですか、宜う御座いますお出しなさい私が明日の朝迄にすつかり王樣の云ふ通

りにして參りませう」と云ひますので皇子は百斤の芥子を皆んな蟻に渡すと蟻は見る間に何千匹だか何万匹だか判らない位な大勢の家來を集めて見るまに芥子の油を皆拔いてしまひましたそこで皇子は翌朝之を王樣に差上げると王樣も嬉んで是で宜しい」と云つて今度は第二の問を御出しになりました。夫れは此王樣が先達つて狩をなさつた時に山から捕まへて入らしつた化物が二匹岩屋の中に閉ぢ込めてありましたが。此化物は不思議な魔法を使ふので人間には何うしても殺すことが出來ません。之を退治て來いとお仰しやるのです、皇子は亦外へ出てから

「外の人間にも退治られないものを私に退治ろと云つた所で同じことだが、はて何うしたものかイツソ遣り損ふ迄も其化物と戰つて見やうからイヤ〳〵私だつて人間だから矢張りだめだらうはて愈困つたかな」と一入考へて居た時に又氣が就いたのは彼の虎のことです。皇子ははたと手を拍つて

「アヽそをだ〳〵なぜ早く氣が着かなかつたらう虎の王ー　々々々ー、と云ひますと向ふの方からウチー〳〵と唸りながら此間の虎が出て來ました。皇子が何か頻りと考へて居るのを見て

「若樣、今日は御機嫌宜しう、唯今は御呼びになりましたのはあなた樣で御座いますか何んぞ御用で、大層何か御考へですなと云ひました。

「ヲヽ虎かお前に少し賴みたいことが夫れは外でもないあそこの王樣の城の隅にある岩屋の中に二匹の化物が居るがあれをお前に殺すことが出來樣か」と云ひますと虎は

「夫れは譯はないことです早速行つ付けませう」と云つて友達の虎を一匹誘つて來て忽ち食ひ殺してしまいました。翌朝王樣は之を見て更に第三の問を御出しなさいました。夫れは斯う云ふのです此い城の家根の上の中空に人の目に見えぬ高さの處に一つの大太鼓が掛けてあるから是れを叩いて

來いと云ふことです、皇子は是を聞くや否や早速外へ出て例の寢臺へ乘つて

「寢臺よ々々有りがたき寢臺は是から中空の太鼓の所へ行け」と云ひますと寢臺はガタ〳〵フーット飛び上つて忽ち太鼓の所に參りました。

皇子は早速持つて居て劍の鞘で蓼々と力一ぱい太鼓を叩きましたので下では此國の人々何事が起つたのかと思つて皆外へ出て不思議がつて空を見上げて居ました。

皇子は暫時の間叩いて居ましたが時分はよしと思ふ頃降りて來て王樣の前へ出て來ました。

是れで三つの問もすつかり出來ましたので王樣は大層御喜びになつて、お姫樣を下されそして此國の王樣にすることに致しました。

皇子は漸くのことで思ひを遂げたので一と先づお姫樣を連れてお父樣の國へ歸り夫れから改めて此國の王樣になりました。

めでたし〳〵〳〵